福祉社会形成のための学生ボランティアリクルートの方策

福祉社会開発研究センタープロジェクト1　研究員
東洋大学社会学部　助教
後藤　広史

Ⅰ．はじめに

孤独死、認知症高齢者、「ホームレス」と呼ばれる人々の増加など、地域における新たな福祉課題が顕在化するようになって久しい。これらの福祉課題は、個別具体的な形をとって現われ、見守りなどの日常的な支援が必要となることが多いために、公的な福祉サービスだけでは対応することが難しい性格を有している。

こうした福祉課題が顕在化してきた背景の一つには、いうまでもなく、かつてそれらの福祉課題を支えてきた地域の共同体や家族の崩壊がある。そのためこんにちそれらが担ってきた福祉機能を代替・補完する組織―市民活動団体やNPOなど―に期待が寄せられている。

しかしながらこうした団体は財政的に困難を抱えていることが少なくない（内閣府2010）。そのためその多くは活動を継続していくためにボランティアを必要としており、その獲得に向けた取り組みをおこなっているが、功を奏していないのが実情である（内閣府2007）。冒頭述べた福祉課題の解決の一翼を担う市民活動団体やNPOの活動を維持していくためには、活動資金を安定させるための方策を検討する一方で、そうした組織にコミットメントするボランティアを如何に確保するかということを併せて検討する必要があろう。

本稿はそのボランティアの担い手としての学生ボランティアに着目して、その活動の実態を明らかにすることを通して、学生ボランティアをリクルートする際に求められる視点と方法について検討することを目的としている。

Ⅱ．調査方法

社会学部および法学部対象の大講義の授業、さらに社会学部社会福祉学科の2つのゼミを選定し、その授業を履修している東洋大学の学生に対して無記名自記式アンケート調査を行った。配布数は240枚、回収数204枚、回収率は85％であった。

なお本調査では、ボランティア活動の中身についてこちらで限定を加えていない。すなわち、行った活動をボランティア活動と判断するかどうかは回答者の判断に委ねている。ただし、授業や課題などで強制的に行ったボランティアについてはボランティア活動に含めていない。

Ⅲ．調査結果

1．対象者の属性

表1は対象者の属性をまとめたものである。

表１　対象者の属性

性別	N	%
男	88	55
女	72	45
合計	160	100.0
学科		
社会福祉	38	25.0
社会福祉以外の社会学部の学科	44	28.9
法律学部の学科	69	45.4
その他の学科	1	0.7
合計	152	100.0
学年		
1年	1	0.6
2年	63	40.1
3年	71	45.2
4年	22	14.0
合計	157	100.0
ボランティアサークル		
入っている	22	13.8
入っていない	133	83.1
入っていたが辞めた	5	3.1
合計	160	100.0
通学時間		
30分未満	18	8.7
31 ～ 59分	36	17.4
60 ～ 89分	49	23.7
90分以上	57	27.5
合計	160	100.0

性別は、「男性」が55％、「女性」が45％であった。

学科は「社会福祉学科」が25％、「それ以外の社会学部の学科」（社会学科、メディアコミュニケーション学科、社会心理学科、社会文化システム学科）が28.9％、「法学部の学科」（法律学科、企業法学科）が45.4％、その他の学科が0.7％であった。

学年は、「1年生」が0.6％、「2年生」が40.1％、「3年生」が45.2％、「4年生」が14％であった。

ボランティアサークルの加入の有無は、「入っている」が13.8％、「入っていない」が83.1％、「入っていたが辞めた」が3.1％であった。

通学時間は、「30分未満」が8.7％、「31 ～ 59分」が17.4％、「60 ～ 89分」が23.7％、「90分以上」が27.5％であった。

２．ボランティア活動の実態

それでは、学生のボランティア活動の実態についてみてみよう。

１）ボランティア活動の経験とその継続性

表２　ボランティア活動の経験とその継続性

	N	%
継続的にしている	13	6.5
継続的にしていたがここ一年はしていない	5	2.5
不定期にしている	37	18.5
不定期にしていたがここ一年はしていない	50	25
過去も現在もしたことがない	95	47.5
合計	200	100

ボランティア活動の経験とその継続性について尋ねたところ、一番割合が高かったのは「過去も現在もしたことがない」で約5割、次いで「不定期にしていたがここ一年はしていない」が25％、「不定期にしている」が18.5％であった。他方「継続的にしていたがここ一年はしていない」は2.5％と最も割合が低かった[i]。

すなわち一度でもボランティア活動を経験したことがある割合は52.5％ということになる。日本学生支援機構が2005年に行った調査（学生ボランティア活動に関する調査報告書、以下「2005年調査」）ではその割合は65％となっており、それと比較すると今回の調査対象者はやや割合が低いといえる。ただし、本調査は学校の課題などで強制的に行ったボランティア活動はボランティア活動に含めていないため、単純な比較はできない。

（１）継続参加群の実態

上記で「継続的にしている」と回答した人に活動の頻度と、その理由を尋ねた。

最も割合が高かったのは、「月に1回程度」で53.8％、次いで「週に1回程度」が30.8％であった。継続的にしている人でも半数は月1回程度とそれほど頻繁に活動しているわけではないことがわかる。

表３　継続的に参加している人の参加頻度

	N	%
週に1回程度	4	30.8
2週間に1回程度	1	7.7
月に1回程度	7	53.8
その他	1	7.7
合計	13	100

表４　継続して活動に参加している理由

	N	%
活動自体に興味があるから、団体の趣旨に共感しているから	5	38.5
その活動にやりがいを感じているから	2	15.4
責任を感じているから	3	23.1
活動先の人間関係がよいから	1	7.7
その他	2	15.4
合計	13	100

さらにその理由について尋ねたところ（表4)、「活動自体に興味があるから、団体の趣旨に共感しているから」が38.5％で最も割合が高かった。次いで「責任を感じているから」が23.1％であった。

ただし、この群（継続的にボランティア活動に参加している群）はそもそも母数自体が少ない点に留意する必要がある。

（２）不定期参加群の特徴

不定期に参加していると回答した人にその理由を尋ねた（図1)。

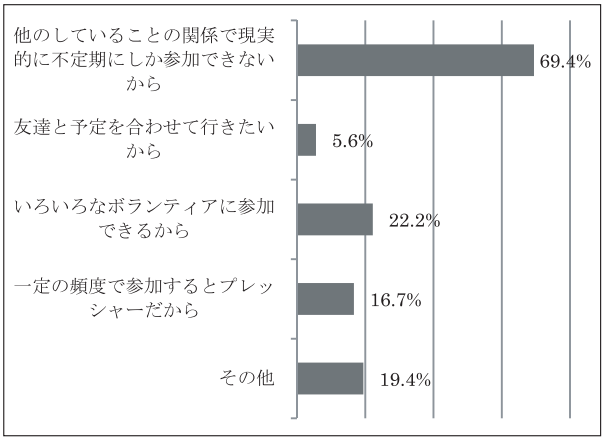

図１　不定期で参加している人の理由（複数回答）

最も割合が高かったのは、「他のしていることの関係で現実的に不定期にしか参加できないから」で69.4％、次いで「いろいろなボランティアに参加できるから」が22.2％、「一定の頻度で参加するとプレッシャーだから」が16.7％であった。不定期にボランティアに参加している人は積極的な理由というよりも消極的な理由でそのような活動形態をとっていることがわかる。

（３）不定期中断群

「不定期にしていたがここ一年はしていない」と回答した人にその理由を尋ねた。

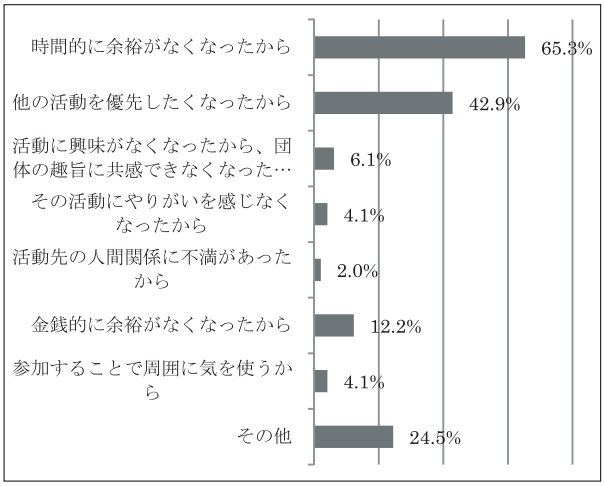

図２　不定期に参加した人がボランティア活動を中断した理由（複数回答）

最も割合が高かったのは、「時間的に余裕がなくなったから」で65.3％であった。次いで「他の活動を優先させたくなったから」が42.9％、「その他」が24.5％であった。「その他」の中身として回答があったものとしては、「引っ越したから」（１人)、「活動する機会がなくなったから」(1人)「周囲の人に誘われて参加していたため、誘われなくなったから参加しなくなった」(1人)、「一度だけ経験したいと思ったから」(1人)、「高校受験の内申のためにしていただけだから」(1人）などの回答があった。

（４）不参加群の特徴

「過去も現在も（ボランティア活動を）したことがない」と回答した人に、ボランティア活動自体に興味があるかどうか尋ねた。

表５　ボランティア活動に対する興味

	N	%
ある	61	64.9
ない	33	35.1
合計	94	100

「ある」と回答した人は64.9％、「ない」と回答した人は35.1％であった。半数以上はボランティア活動に興味がありながら具体的な行動に至っていないことがわかる。

そこでボランティア活動に興味が「ある」と回答した人に、なぜ具体的な行動に至ってないのか尋ねた。

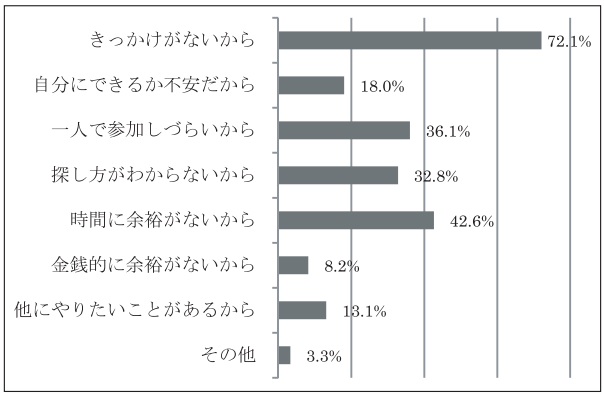

図３　具体的な行動に至っていない理由（複数回答）

最も割合が高かったのは「きっかけがないから」で72.1％、次いで「時間がないから」が42.6％、「探し方がわからないから」が32.8％、「自分にできるか不安だから」が18.0％であった。

時間的に余裕がない場合や他にやりたいことがある場合は難しいとしても、この結果は何らかの働きかけをすることで具体的な行動に移る可能性があることを示唆している。

（５）参加群の特徴

表１で「継続的に参加している」／「継続的に参加していたが、ここ１年はしていない」／「不定期に参加している」／「不定期に参加していたがここ1年はしていない」と回答した人＝「参加群」に活動先を知ったきっかけについて尋ねた。

表６　活動先を知ったきっかけ

	N	%
広報・チラシ	11	12
友人・知人・家族	34	37
HP等インターネット	2	2.2
サークル活動	12	13
授業や先生の紹介	29	31.5
その他	4	4.3
合計	92	100

最も割合が高かったのは、「友人・知人・家族」で37.0％、次いで「授業や先生の紹介」が31.5％であった。身近な他者や授業を媒介にしてボランティア先の情報を得ていることがわかる。

しかし、当然のことながら情報を得たからといってもすべての人が実際の行動に移るわけではない。そこで次にボランティア活動に至った動機についてみてみよう。

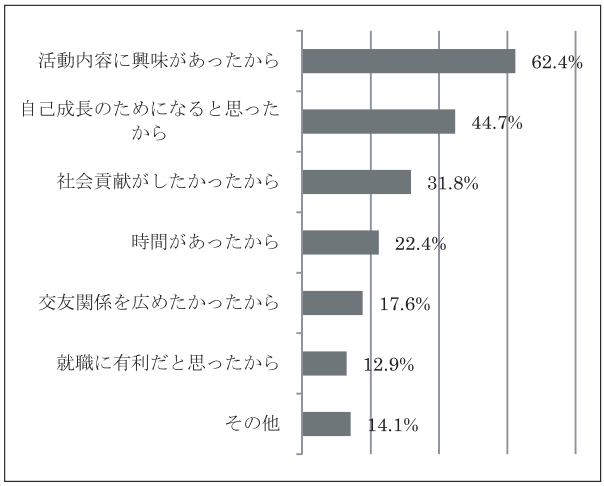

図４　ボランティア活動に至った動機

最も割合が高かったのは「活動内容に興味があったから」で62.4％、次いで「自己の成長のためになると思ったから」が44.7％、「社会貢献がしたかったから」が31.8％、「時間があったから」が22.4％であった。

2005年調査では、「困っている人の手助けをしたいから」、「新しく感動できる体験をしたいから」、「新しい人と出会いたいから」が上位を占めていた。項目こそ違うものの、利他的動機と利己的動機が併存している点は同じであるといえる。

3．参加群／非参加群（興味あり）の比較

本稿の目的は、市民活動団体・NPOなどの団体が学生ボランティアをリクルートする際に求められる視点や方法について検討することである。したがって当面の課題は、ボランティア活動に参加したことがないが、活動自体には興味がある、と回答した人をどのような方法で具体的なアクションにつなげるか検討することであろう。

そこで本研究では回答者を「ボランティア活動の経験の有無」と「ボランティア活動に対する興味の有無」に基づいて以下のように類型化し、①と②の違いを比較することを通して上記の課題を検討していきたい。

①「参加群」（52.8%　N=105）

一度でもボランティア活動に参加したことがあると回答したグループ。

②「非参加群（（興味）あり）（30.7%　N=61）

一度もボランティア活動に参加したことがないが、興味はあると回答したグループ。

③「非参加群（（興味）なし）」（15.9%　N＝33）

一度もボランティア活動に参加したことがなく、興味もないと回答したグループ。

1）学科との関係

図5は、所属している学科との関係をみたものである。

当然のことながら「社会福祉学科」は「参加群」の割合が最も高く、「社会福祉学部以外の社会学部の学科」、「法学部の学科」になるにつれてその割合が低くなっている。

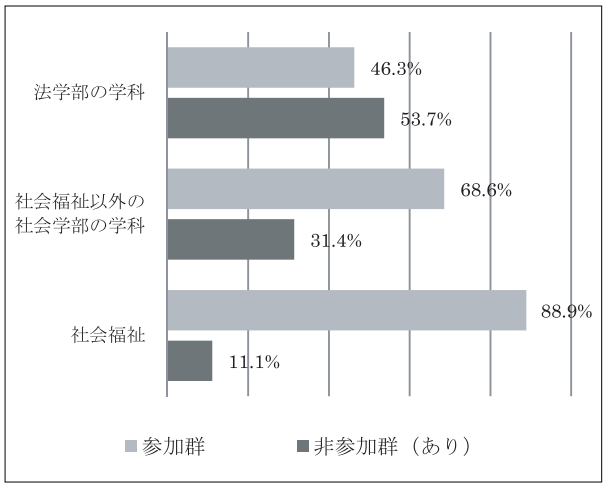

図５　学科との関係　　P<0.01

興味深いのは、社会福祉以外の社会学部の学科よりも、法学部の学科のほうが非参加群でボランティア活動に興味があると答えている割合が高い点である。

2）性別との関係

図6は性別との関係をみたものである。

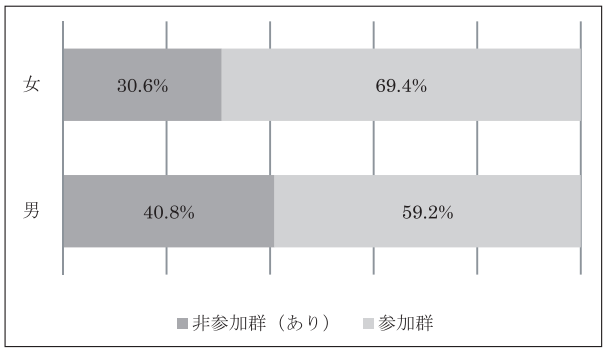

図６　性別との関係

統計的に有意な差こそみられなかったが、大まかな傾向としては女性の方がボランティア活動の経験があるといえそうである。2005年調査でも女性の方がボランティア経験のある割合が高かった。ただしその理由についてはわからない。

3）ボランティア活動をしている友人の数との関係

さて、表6にみるように、ボランティア活動先を知ったきっかけは「友人・知人・家族」が最も多かった。ボランティア活動に実際に至った動機でも「友達に誘われたから」の項目の割合は高かった。

これらの結果から実際にボランティア活動に参加する背景には、すでにボランティア活動している友人の影響があると思われる。そこで「ボランティア活動に参加している友人の数」との関係をみてみよう。

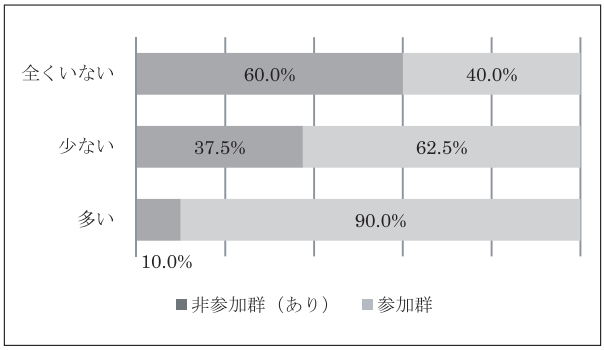

図７　ボランティア活動をしている友人の多寡との関係 P<0.01

図7に見るように周りにボランティア活動をしている友人の数が多いほど参加群の割合が高くなっていることがわかる。

4）アルバイトの実態との関係

図9・10はアルバイトの実態との関係についてみたものである。

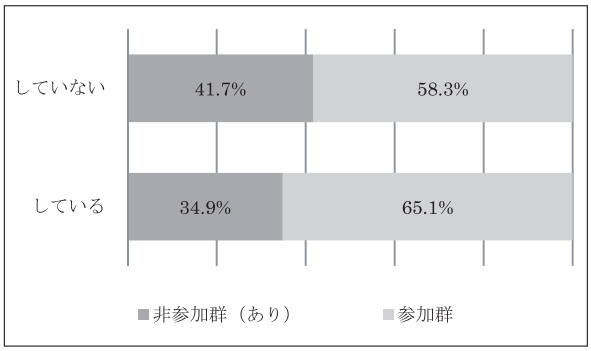

図８　アルバイト（している／していない）との関係

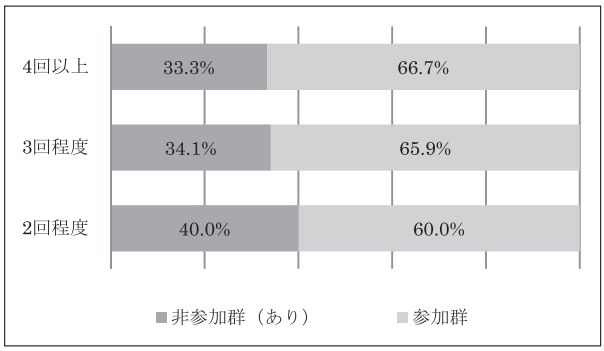

図９　アルバイトの回数（週）との関係

アルバイトをしている学生のほうがボランティアに割ける時間が相対的に少ないと考えたが、図9の結果をみる限りむしろアルバイトをしている方が参加群の割合が高くなっている（ただし統計的に有意な差はない）。また図10にみるように、アルバイトの回数（週）が増えても参加群、非参加群（あり）の割合に差は見られない。

5）通学時間との関係

通学時間との関係をみたものが図11である。

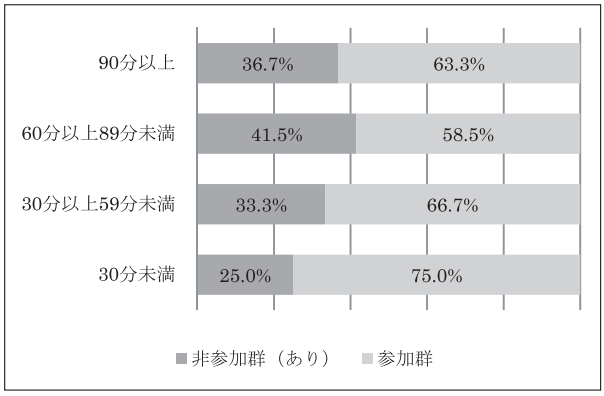

図 10　通学時間との関係

先ほどと同様に通学時間が長くなるにつれて、ボランティアに割ける時間が短くなると考えたが、こちらも有意な差は認められなかった。ここから非参加群（あり）は、少なくともアルバイトや通学に時間がとられてこれまでボランティアに参加できなかったわけではない、ということが示唆される。特にアルバイトとの関係については先行研究の知見を支持していない点で

興味深い（日本学生支援機構2005；森2002；松岡・本郷2009）。

Ⅳ．考察―学生ボランティアリクルートの方策

以上の結果に基づいて、学生ボランティアをリクルートする際の方策について考察していきたい。

まずボランティアに参加している人たちの「きっかけ」で割合が高かったのは、「友人・知人・家族からの紹介」、「授業や学校の先生からの紹介」であった（表6）。前者はボランティアをしている友人の数が多いと、ボランティアをしている人割合が高まるという図7の結果と呼応している。このことを逆から考えれば、ボランティアに参加していない人の周りにはボランティア活動をしている友人が少ないということになる。したがってこのような環境では「友人・知人・家族からの紹介」がボランティア活動先を知るきっかけとはなりにくいであろう。従ってボランティア活動に参加していない人にとって、活動先を知る現実的なルートとなりうるのは、「授業や学校の先生からの紹介」ということになる。ただし上述したように、それがきっかけとなってもそのことがただちに実際の行動と結びつくわけではない。実際の行動に結びつくためには、魅力的な活動をしている団体を紹介するだけでは不十分である。図4の参加群の活動に至った動機を今一度みてみると、「活動内容に興味があったから」という理由のほかに、「自己成長のためになるから」という項目の割合が高かった。つまり、単にボランティア先を紹介するだけではなく、その際にその活動に参加することによってどのような成長がもたらされるのかということについて具体的なイメージを持ってもらうことが大切である。そのため場合によっては紹介する活動先のスタッフやそこでボランティアをしている人を授業に招くなどして、その経験によって自分がどう成長したのかを具体的に話してもらうなどの方策が検討されてよいかもしれない。

次に逆の角度から、すなわち非参加群（あり）がボランティア活動をしていない理由（図3）から、学生ボランティアリクルートの方策を検討してみよう。この項目のうち「きっかけがないから」、「探し方がわからないから」については上述したような取り組みを行うことでクリアできる問題であろう。次に「時間に余裕がないから」という理由についてであるが、図9・10・11でみたように、アルバイトをしている、通学時間が長いという変数はボランティア参加／非参加という行動に影響を与えていなかった。従ってここでいう「時間に余裕がないから」という意味は次の二つの解釈が可能である。すなわち「アルバイト以外の活動が忙しくて現実的に時間に余裕がない」という可能性と、「ボランティア活動は長く続けるべきものであるという認識があり、それと自分がボランティア活動に割ける時間を比較考慮した結果、時間に余裕がないと判断している」という可能性である。前者の場合は仕方がないとしても、後者については、そのような形態をとらないボランティア先紹介することで実際の活動に結び付くかもしれない。また、「1人では参加しづらいから」という項目の割合も少なくないので、グループで参加できることなどを強調するなどの工夫も必要であろう。

そして図7からわかるように学生ボランティアをリクルートするうえで最も重要なのは、上述した取り組みを通してボランティア活動に参加した学生が、その経験を友人に伝えることができる場[ii]を積極的につくりだしていく、ということである。

Ⅴ．おわりに

最後に今後の課題について述べておきたい。それは「ボランティア活動の継続性」という問題である。この場合、不定期な形で活動を続けるという意味での継続性と、週1回など定期的な形で活動を続けるという意味での継続性という二つの意味があるが[iii]、本調査の結果を見る限り学生が求めているボランティアの形は前者といえるだろう（表2）[iv]。

もちろんボランティアとはあくまで自発性に基づいた活動が基本であり、活動者の意向を無視して継続を

強いるのはボランティアの本質になじまないし、むしろ活動の参入自体を妨げることになろう。しかしながら、受け入れる側は、ある程度継続的に関わってくれるボランティアを求めている（内閣府2007）。そうだとすれば、今後はこうした学生のボランティア活動の実態・意識をふまえた上で、継続したいと思わせるための取り組みを受け入れ側が積極的に行う必要があるだろう[v]。そのための具体的な方法論については今後の課題である。

【付記】

東洋大学社会学部社会福祉学科では、平成21年度より「地域密着型福祉および福祉社会形成のための実践に向けた応用力の習得を目指す福祉専門職養成教育プログラム」（通称「助教プログラム」）を行っている。本調査は、当該プログラムの受け入れ団体の一つである特定非営利活動法人「セカンドハーベストジャパン」で活動行った伊藤 栞、小黒俊也、村岡 蛍（社会福祉学科2年生）の3学生の問題関心に基づいて行われたものである。なお筆者は調査票の設計・分析等のオブザーバーとして関わった。

受け入れをしてくださった「セカンドハーベストジャパン」のみなさま、貴重な授業時間を割いて調査に協力してくださった、高山直樹 先生（社会学部）、中川　敦 先生（社会学部）、中田有紀 先生（法学部）の先生方にはこの場を借りて感謝申し上げます。また、課外活動にもかかわらず熱心に取り組んだ3名の学生に敬意を表したいと思います。

【注】

i　この群の活動頻度は「週に１回程度」が2人、「2週間に１回程度」、「月に１回程度」、「その他」がそれぞれ1人であった。中断した理由としては、「時間的に余裕がなくなったから」が3人、「その他」が1人、「未回答」が1人であった。

ii　例えばゼミ等の活用が考えられる。

iii　ただしここで重要なのは、ボランティア活動の継続性を考えるにあたって、活動先を一つの機関に限定しないという視点である。詳しくは高木（2009）を参照。

iv　なお近年こうした形のボランティアは「エピソディクボランティア」という概念で把握され、研究が進められている（Harrison 1995；高木2009）。

v　これについても前掲の高木（2009）が示唆に富んだ視点を提供しているが、そこでは社会福祉協議会のボランティアコーディネーターに焦点があたっている。

【文献】

David A. Harrison(1995)., Volunteer Motivation and Attendance Decisions: Competitive Theory;Testing in Multiple Samples From a Homeless Shelter., Journal of Applied Psychology 80(3),371-385.

松岡佐智・本郷秀和(2009)「福岡県立大学社会福祉学科学生のボランティア意識に関する調査研究―福祉ボランティアを通じた経験型実習導入の可能性Ⅱ―」『福岡県立大学人間社会学部紀要』17（2）,119-31.

森法房（2002）「山口県立大学におけるボランティア活動に関する調査報告」『山口県立大学社会福祉学部紀要』8,39-53.

日本学生支援機構（2005）『学生ボランティア活動に関する調査報告書』.

佐々木正道編（2003）『大学生とボランティア活動に関する実証的研究』ミネルヴァ書房.

高木寛之（2009）「ボランティア文化の変容に対応したボランティア支援の在り方」『福祉社会研究』6,61-80.

全国社会福祉協議会（2001）『全国ボランティア活動者実態調査』.